

日本農士学校の農家経営教育

佐藤幸也*

(2002年9月30日受理)

1節 はじめに

日本農士学校は、安岡正篤によって設立された財団法人金鷄学院の中心的な人材養成機関であった。

ここでは、世界的な帝国主義の再編と、昭和恐慌を契機とする急激な社会変動の波を受けて、いわばアノミー状態に陥った日本社会を、一面ではより合理的な近代国家への脱皮、すなわち、支配層が指導力を発揮して(その中心は革新官僚)国内における封建的諸要素の払拭ないしは近代化によって組織改編を早急に行い、その一方、「日本主義¹⁾」やいわゆる天皇制を根幹にすえた国家主義イデオロギーにより、高度国防国家、後の翼賛体制を自ら支えんとする国民に仕立て上げる教化体制の拡充が企画されていた²⁾。

その背景には、世界恐慌につながることになる第一次世界大戦後の資本主義経済の世界的行き詰まり。それに起因する農民運動、労働運動、普選運動の展開などに現れたような国内体制の動揺。さらに、列強によって収奪され極限状態にまで追い詰められた植民地の人々が、民族の独立と主権の回復をかけて各地で運動を展開したこと。共産主義等の影響も受けながら、そうした国々や独立運動を展開する人々への支援運動が帝国主義国家内部からも盛り上がり、全般的危機が顕在化したことなどがある³⁾。

欧米の帝国主義諸国家がそれぞれの政策で経済のブロック化を推し進めつつ国内体制の再編を図ったように⁴⁾、政党の集合離散、軍部(それも内部的には統制を失い極めて分裂状態にある)の露骨な政治介入と独走、治安維持法体制の強化による民主勢力の根絶化、官僚層内部における統制派と皇道派の争いのような支配層における真空状態とも呼ぶべき状況を呈していた日本も、国家独占資本主義体制をどのように確立して行くのかという深刻な課題に直面していた。

その中で、日本の支配構造を末端で支えるべき農村社会の混乱に対し、一刻も早い対策が求められていたことから、安岡正篤の主張と手法は農村対策の指導理念として高く評価されることとなり⁵⁾、その後国家運営を中枢で担う人々、例えば牧野伸顕、後藤文夫などが日本農士学校に寄せる期待はことさら大きくなったのであった。

ところで、農民運動の展開と農業恐慌による強烈なダメージを受けた農村の疲弊を克服するには、大まかに言って二つの方策が求められた。その一つは、「農は国の本」という農本主義思想を基盤に、「醇風美俗」、「隣保共助」などを強調し、部落秩序を引き締め、労働運動などに

* 岩手大学教育学部

よって高揚して来た社会意識を封じ込め（その意味で、地主—小作という階級対立の芽を摘み取る）、「地方改良運動」、「戊申詔書」、「軍人勅諭」などに見る天皇の赤子としての「臣民」の責務を全うさせる教化の徹底である。

もう一つは、近代農法を取り入れつつ農業技術の改良普及を図ることで増産をすること、農業の多角経営化を図ることでリスク分散と精勤主義による自家労働力（ひいては村の全労働能力の十全なる発揮）の完全燃焼によって収入の安定を図り、流通販売の合理化（共同購入、利用、販売など）と農産加工を積極的に行い購入を抑制し家庭内自給を高めつつ付加価値のある商品作物を市場に供給することで収益性の向上を図ること等である。

つまり、伝統的な部落秩序を維持しつつ、それに依拠しながら農業経営の合理化を図り、農村社会の運営を安定的ならしめる方策である。上記の施策は、一農家に出来ることではなく、部落（集落）ぐるみでの協力、協調体制が必要となる。そこで、地主にも生産農民の現状にも配慮しつつ、農村の生産、生活のあらゆる領域に行政がイニシアチブを発揮し（ただしその指導は従来からの村の旧支配層が中心的）再編統合を推進した。産業組合運動が全国的に隆盛を迎えるのはこのことによる⁶⁾。

そして、こうしたことは低賃金構造の労働者に、安価な農産物を安定的に供給するという独占資本の利害と国家的課題に応えるものであり、農産物における国内市場の拡大、発展をもたらす効果も期待出来る。それが「銃後の農村」建設の主眼になっていくことは言うまでもないだろう。しかも、重要なことは、以上の方策が単なる利潤追求や近代的経営理念の導入による農村の近代化ではなくして、「家を齋へ」「皇国農村を樹立」することが「真・善・美」の源泉たる天皇の深き慈愛に応える臣民の道、行に収斂されていく点にある。

そこで、本稿では、農村の疲弊克服と農本（主義）思想による農村再編に指導的役割を果たすことを目的に設立された日本農士学校において、やがて農村の中心人物、中堅人物として成長し、村の「経営」もなし得る実務的能力と精神を育成するために行われた教育を、学生の学習活動である「農村視察報告」、「卒業論文」、「我が農場」を具体的に分析することによって明らかにする。

なお、日本農士学校についてはこれまでその内容がほとんど明らかにされていない。「農村視察報告」、「卒業論文」、「我が農場」を取り上げることは、歴史的資料としての価値をも有することから、一部ではあるが、紙数の許す限り本文中に記載する。

2節 日本農士学校生の学習と「卒業論文」

学生には農学や農士道など中心に学ぶ「正徳科目」としての座学⁷⁾や金鶏学院関係者、当時の軍政財界のトップに位置する人々による講話、時事解説と並行して行われた「利用科目」としての農業及び農村経営に関する実践的学習があった。

特に、後者は、関東地域では著名な篤農家や帝大農学部を修了してきた研究者、現場の行政や農業技術に精通した農業試験場の技官など、当時としては第一級の指導陣によって教授体制が組まれていた。日本高等国民学校ほど優れた技術指導とはいかなかったとはいえ⁸⁾、高等農林学校をはじめとする専門教育機関に進まなかった農村子弟が受けることの出来た最も優れた教授体制のひとつであったとは言えよう。

さて、「利用科目」は学生にそれぞれ割り当てられた農場での技術的実習と、それを「家⁹⁾」

で経営することによって農家経営に必要な計画の立案、差配、運営といった事務的能力の習得。その応用としての「農村視察報告」、「我が農場」（卒業論文について重要な自分の家の農業経営分析）などがあった。そして、「正徳科目」と「利用科目」、その他あらゆる日本農士学校での学習の総仕上げとして「卒業論文」の作成があった。ここでは、最初に卒業論文から見てみる。卒業論文は〔表1-1〕以下のようにになっている。

〔表1-1〕日本農士学校 学生研究論文集 題目一覧（昭和6年）

（原資料は、安岡正篤記念館の書架に保存されていたものであり（一部未発見）、他の資料とも比較して確認できたもののみを順に掲載。ここでの「家」は、所属のこと。）

一期 平成8年3月卒（16名）

	氏名	論文名	備考	出身
1	菰田正郎	孟子王道思想	城家	福岡
2	田下竹彦	道元禪師の證道		長野
3	金子萬蔵 同	大塩平八郎先生の研究	(2年)	埼玉
		二宮尊徳先生の農村人教育		
4	宮澤透	徳川時代に於ける庄屋名主制度の研究	西本宿家	栃木
5	秋岡美彦	梨の研究		兵庫
6	田沢哲郎	陸稲栽培研究	沢、澤共に使用している	長野
	田沢哲郎	佐久間象山先生遺文の研究		
7	山浦公男	豚肉加工	同窓生名簿無	中退?
8	品川修	自給肥料の研究	(坂下家)	同上
9	大野三郎	血性 教育家 吉田松陰先生		埼玉
10	越智綱義	佐藤信淵の大陸政策に就いて		愛媛

*1 3番金子、6番田沢のように複数の論文を仕上げている学生がいる。

2 修了してからも研究生として残り、別の卒業論文を作成する場合もあった。

3 原資料の保存状況や関係者の死去により確認出来なかったものについては空欄とする。

〔表1-2〕二期の① 昭和9年3月卒（9名）

	氏名	論文名	備考	出身
1	八坂敏夫	葉隠	佐賀	佐賀
2	武田正中	淳仁天皇に就いて		佐賀
3	西坂志雄	大楠公		不明
4	正嶋重夫	山岡鐵舟	南城	愛媛
5	細谷辰次	茄子栽培の研究		埼玉
6	野原正二郎	百姓と養生		埼玉
以下 不明				

*1 3番西坂の氏名は確認出来ず

*2 二期生からは人数が急激に増加したため、原本が3分冊となっている。

[表1-3] 二期の②-1 昭和9年3月卒(27名)

	氏名	論文名	備考	出身
1	久留田 裕一	論語割記		埼玉
2	原 浩	大學研究		千葉
3	大橋 眞次	本末論		三重
4	矢島 善治	吉田松陰先生の士規七則の研究		長野
5	赤池 富雄	二宮翁夜話研究		長野
6	上田 武	関が原合戦私考		大阪
7	山川 幸一	農村之人 中江藤樹先生		愛媛
8	加藤 巖	青年 石川翁		宮城
9	遠藤 齋三	志士 高野長英		岩手
10	野沢 隆治	橋本左内研究		栃木
11	横川 正次	齋藤彌九郎		名簿記載無 (富山か)不明
12	桐村 不器雄	五人組制度の起因		京都
13	高田 茂八郎	祭禮と郷土娯楽		岩手
14	吉田 浪次	農村神事		埼玉

[表1-4] 二期の②-2 昭和9年3月卒(27名)

	氏名	論文名	備考	出身
15	山口 重利	蒟蒻の研究		埼玉
16	中澤 總二	馬鈴薯の加工に就いて		長野
17	内山 三男	自温育雛の餌付及必要事項		静岡
18	長谷川 胞蔵	農家副業としての養鯉	宮崎村	宮城
19	井藤 喜一	生命の眞髓		兵庫

*1 宮城県宮崎村は菅原兵治の出身地であり、戦後もその影響が強く残った。

以上が卒業論文の例である。これを見ると、二つのパターンが見いだせる。一つは、安岡、菅原の思想や講義に触発されて、先哲に学ぶというものである。その多くは、学生がそれまで触れる機会が少なかったものか、特に意識して来なかった思想との出会いであり、学生にとっては、ある意味で日本文化の古層まで踏み込んだ考え方に触れることで、天皇制国家の正統性を自覚するとき作用がもたらされた。

もちろん、彼らの意識には、安岡正篤という希代のカリスマの元に集う日本を代表する人々への真れと尊敬、そして、そのような人々を指導陣にいただく日本農士学校というさながら皇国日本の大本山とも呼べるところで学んでいることの誇りが、「正徳科目」で触れた人物や思想にひかれ、より深く研究してみたいという欲求に導かれての卒業論文作成ということにもなる。

金鷄学院や日本農士学校の設立趣旨から見て取れるように、農村における武士道の実践に

は、何よりもそうした人物たる自覚が必要であり、そのための教養を身につけること。それも合理的に理解することではなく、東洋の先哲の精神を感得することに主眼が置かれることからして、たとえ解釈が多少独善的であったり、学問的でなかったりしても、それは些細な事として捨象される。深く沈思黙考するところに第一段階としての意義があり、帰村したならば卒業論文で学んだところを座右の精神として家や村や国家のために精勤を捧げることこそが重要であって、そのための精神性の獲得に卒業論文は位置付けられた面がある。いかなる艱難辛苦も耐え抜き、斎家、治郷に努めるのが日本農士学校修了生に期待されることであったことから、二宮尊徳や志士としての吉田松陰などが選ばれたのは、青年期のヒロイズムやロマンティズムをも満たすものであったと言えよう。

そして上記の勉強は深く胸に刻印された。今日でも日本農士学校やそれと連動していた荘内松柏会員を中心に（その主要メンバーは旧荘内藩士）庄内で論語が盛んに読まれ、宮城県でも菅原の門下生を中心に「耕心会」の活動や孔子廟を立てる運動がなされるのは、青年としての一時期を日本農士学校で過ごし、魂を揺さぶられる経験を重ね、さらに帰郷してからもその関係機関で修養（研修）を続けた成果の一つであり、日本農士学校の教育が生涯にわたってどれほど影響力を持ち続けるものなのかを示している。個々人においては卒業研究（論文）が人生の宝の一つなのである。学生は、先哲の思想を自分なりに咀嚼することで、自分の生き方を定める指針とした。卒業論文は郷土に帰ってから農民（指導者）として生きるための原動力、言葉を変えれば、テイク・オフするためのエンジンの役割を果たしたのであり、それは菅原の狙い通りの効果を発揮したのだった。

二つ目は、技術的な面における研究である。これに取り組む学生は、家や故郷の期待に応えるために新しい技術の習得に励み、それを学習の成果としてまとめたものである。以下の節でも触れるが、日本農士学校が技術的指導を大切にしていたことが理解される。

両方執筆した剛の者もいたが、卒論に関して、菅原はどちらかを勧めるということは無く、学生の問題意識がどこに在るのかを見定めて指導した。ただし、どの分野、題材を取り上げるにしても、それが心底自分自身の生き方の総括にかかわるものでなければならなかった。従って、講義や農場での実習を含めすべての学習活動が卒業論文と結び付く＝血肉になる緊張感あふれるものと学生、教師ともども意識されていた。

3節 農場実習、農業実習と「農村視察報告」

卒業論文が、個人レベルの生き方を問われるものであったとするなら、篤農家の農場での農業実習や経営視察は、「家」ぐるみで行う集団的訓練の場であった。そして、篤農家や模範農場と呼ばれていた所への訪問とそこに泊りこんで受ける講話や実習は、ことさら学生の胸に残るものであった。

視察は、おおむね三日間から長いもので一週間程度である。学生によっては視察に訪れた農場や農家にその後も滞在したり、長期休業中に再度訪問して教をこうなどの例もある。

学生は、役割分担して訪問先の経営分析や作物調査をしたり、篤農家から語られる家の歴史や農業経営の心構え等を書き留めたりしており、それを家長が責任編集するという形式で報告書がまとめられている。この聞き取り、調査、まとめと言った一連の過程が農家経営ないしは農場経営全般に及ぶ基本的実務能力形成にかかわっている。不明な点は、手紙や再訪問によ

〔表2〕 学生視察報告（昭和6, 7年分）

	視察場所及び報告書名	報告書作成者
1	北埼玉郡地方農村視察報告	城 家
2	昭和7年壬申夏期 農村視察 勝鹿村 同行5人	細谷辰治
3	昭和壬申八月 児玉郡視察記	西本宿家 5名 (板垣千代三)
4	昭和7年5月19日—21日 視察入間郡高萩村	駒寺野新田事情 大野三郎
5	昭和7年6月4日 入間郡宗岡村視察報告	田下武彦
6	入間郡大井村農村視察 新井三之助氏農家経営	長瀬信雄
7	昭和7年5月30日 入間郡高萩村 駒寺野新田	高篠家 田島壽吉
8	昭和7年5月29日 視察報告 入間郡鶴崎村村情 武藤儀重氏農家経営	城 家 菰田正郎
9	昭和5年度 鶴ヶ島村農會會務報告書	不 明
10	學園開設ノ動機 埼玉勤勞學園静林塾 入間郡鶴ヶ島村	不 明
11	大里郡男沼村農村事情 田部井氏 農家経営	宮澤透
12	大里郡寄居町藤田 志村勘吾氏 農家経営	金子萬藏
13	埼玉県北足立郡石戸村鈴木敬氏 農家経営視察報告	曾我部重美
14	北足立郡石戸村有畜農業奨励並肥料改善事項	不 明
15	昭和7年1月1日発行 石戸村報 石戸村長	不 明
16	昭和7年5月19~21日 三日間 埼玉県北足立郡石戸村 視察農家 鈴木金次郎 農家視察報告	品川修
17	北足立郡谷塚村 経営報告	秋岡美彦
18	北足立郡谷塚村 關藤十郎氏農家経営	山浦信男
19	大正護國農場設立稟吉 昭和2年 大正護國農場長 埼玉縣北足立郡谷塚村 大字下谷塚 正七位 關藤十郎	不 明

*1 原本は、財団法人安岡正篤記念館所蔵。昭和6, 7年分については、発見出来た資料のみを掲載する。昭和8年以降の「視察報告」は紙数の関係から省略する。

て確認したり、指導に当たってくれた人物が日本農士学校を訪れて生徒に助言するなどもあり、内容的には観念的であったり、稚拙な面を残していたりしつつも、全日本農士学校生の共有財産にすることを考慮して報告書が作成されている点は、「視察報告」の優れた指導方法として留意しておいて良いだろう。

日本農士学校では、「視察報告」以外に、長期休業などを利用して、各自が地元の篤農家や農村指導者の元に赴いて指導を仰いで来た。それは、他所の地域の農村調査という下地を基にして、郷土の実情に合った、農業経営の在り方、家の齋のえかた、農村指導者としての心構えを身につけるための必要事項であった。「視察報告書」はあくまでも基本の習得であり、そこから先は生徒自身の創意と努力が期待されていた。

4 節 「我が農場」

次に、全学生が義務づけられていた「我が農場」という報告書を検討して見よう。ここでは、宮城県宮崎村出身の自作農の例を取りあげたい。その理由は、第一に、調査報告の形式が良く調っており、内容的にも丁寧な仕上げで、他の報告書の模範となるようなものであること。第二に、農村での活躍を期待されていた中堅人物になるための条件、すなわち自作上農層であるということ。第三に、加藤の出身地である宮城県加美郡宮崎村は平野部が極めて少ない林業中心の山村であり、農業生産を発展させるうえで極めた苛酷な自然的条件におかれ、その分国内開拓的意味合いも含めて農業振興に工夫の余地がある村の期待を背負って入校した点。第四に、菅原兵治の出身地である宮崎村（現在宮崎町）の当時の様子を良く伝える内容となっているからである。その意味では、菅原兵治の成長における社会的背景を考察するうえで重要な要素も含んでいる。

[資料1] 「我が農場」 昭和9年3月 加藤 巖

(空欄は原本記載のとうり空白とした。また、目次は原本ではそれぞれ一行である。)

目 次

第一章 地方概況の調査

第一項 位置 第二項 気候 第三項 戸口 第四項 土地及反別 第五項 交通機関
第六項 金融及機関 第七項 小作 第八項 農業労働者

第二章 農場調査

第一項 略図 第二項 地勢及土性 第三項 灌漑及排水

第三章 経営設計の概要

第一項 夏作 第二項 冬作 第三項 養畜 第四項 副業 第五項 自給肥料

第四章 従業者

第五章 農業資本の概要

第六章 生産表

第一項 作物 第一目 水稻生産表 第二目 麦類生産表 第三目 大豆蔬菜其の他生産表
第二項 養畜 第三項 収支豫算

第七章 収支決算

第一章 地方概況の調査

第一項 位置

- 1 宮城県の中中部西に偏し、奥羽山脈の直下
- 2 加美郡の西部に存す 東経 約百四十度 北緯 約 三十八度

第二項 気候

- 1 気温 最寒 一月下旬～二月上旬 平均気温 零下五度
最暑 七月下旬～八月上旬 平均気温 九十度 (十九度の間違いか)
- 2 晴 天 平均日数 約二百五十日
曇 (雨) 天 平均日数 約 百日内外

第三項 戸口

- 1 総戸数 七百十二戸 (昭和二年度)
 農家 四百二十八戸
 商家 五十四戸
 工業家 五十七戸
 その他 残り
- 2 人口 四千九百五十三人 (昭和二年度)
 男二千三百九十一人
 女二千五百六十二人

第四項 土地及反別

- 宅地 一万五千九百二坪
 田 五百十五町二反 畑 百九十九町三反
 公有林 五千八百餘町歩 国有林が全体の六割近くを占める

第五項 交通機関 (図は省略)

- 一 宮崎～中新田線 宮崎旭線は本村道路の大幹線なり
 二 機関 客車用自動車 三台 (定期運輸) 荷物用自動車 二台 荷馬車 十数台
 三 郵便局 (三等) 電信電話

第六項 金融及機関

- 一 頼母子講 (機関) 頼母子講は、一種の貯金組合の如き精神にて運営され、信用により
 成立する一種の金融機関である
- 二 販売組合
 三 低利資金等融通等有り

第七項 一 小作

[表3-1] 小作

種目		物納	金納	備考
田	上	七斗 (玄米)	—	反当トス
	中	六斗 (玄米)	—	
	下	五斗 (玄米)	—	
畑	上	—	五円	
	中	—	四円	
	下	—	三円	

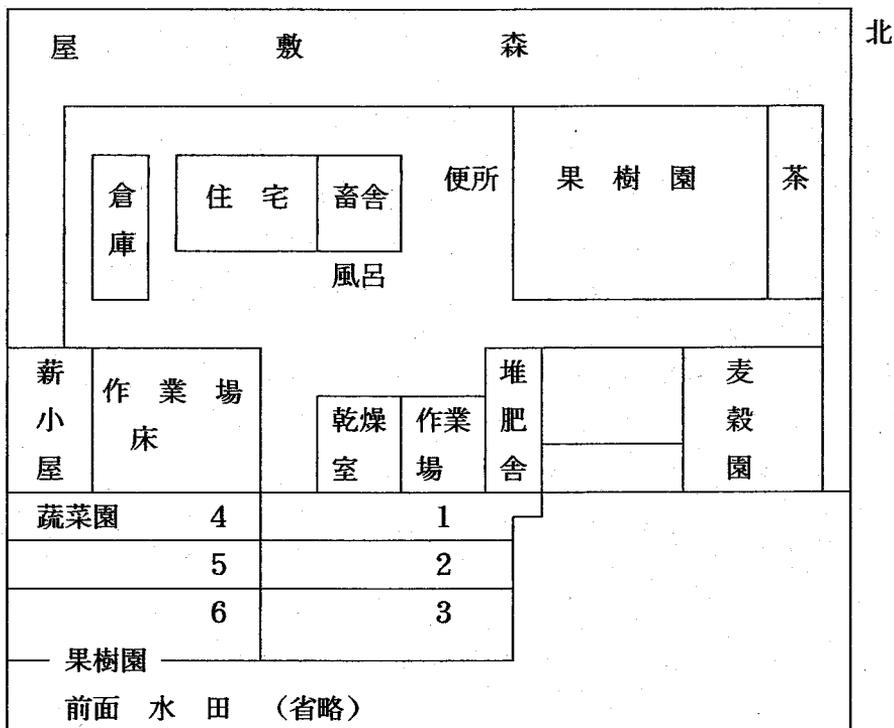
- 二 農家数 二百戸内外 (五割強)
 小作兼業 百二十三戸内外 (二割五歩強)

第八項 農業労働者

- 一 年雇 男 (食費・衣服其他) 百円
 女 (食費・衣服其他) 八十円
 季節雇, 臨時雇 男 (食付) 六十錢 並通 (八十錢)
 女 (食付) 四十五錢 並通 (六十五錢)

第二章 農場調査

第一項 [図1] 加藤家の宅地と農場略図



第二項 地勢及土性 略

第三項 灌漑及排水

[表 3-2] 灌漑及排水

種別 (反別)	番 号	備 考
水利安定 五反	一号 二号	早天の際は減収するも極は不能とか収穫皆無等の被害に至らざる程度のもの 旱害多き時は用水の不足により年半減を免れえず
水利稍不安 五反	三号 四号	
干害多き 一反 水害多き	六号の一部	

第三章 経営設計の概要

第一項 夏作

一 水田	水稻 品 種	面積 (反)
	粳 陸羽一三二号	五反
	愛國 二号	五反
	陸羽 二〇号	四反
	糯 (俗号)	一反
	総反別	一町五反

- 二 畑作
- 大豆 二反 (前作大麦)
 - 小豆 五畝 (前作大麦)
 - 荳胡麻油 一畝
 - 甘藷 五畝
 - 玉葱 四畝 (大豆, 小豆の中に点播)
 - 蔬菜園 一反五畝

[表 3-3] 蔬菜園設計表

	第一 年 目		第二 年 目		第三 年 目	
第一作	甘薯	前秋移	雪菜	前秋播	千藤京菜	四ノ上播
第二作	蕪大根	十一中播	南瓜	五ノ下播	豆	四ノ中播
第三作	雪菜	十一中播	西瓜		秋大根	八ノ上播
第一作	南瓜		年子大根	前秋播	蕪	四ノ上播
第二作	年子大根	十ノ下播	葱	十一上移	茄子	五ノ中移
第三作					甘藷	十一ノ中移 (連作)
第 四 年 目						
第一作	千藤京菜	四ノ上播				
第二作	南瓜	六ノ下移				
第三作	雪菜	九ノ下移				
第一作	甘薯	前秋定植	\			
第二作	菜豆	六ノ下播				
第三作	雪菜	十一上播				
第一作	甘薯	前秋移				
第二作	夏大根	六ノ下播				
第三作	雪菜	十一ノ上播				

第二項 冬作

水田 裏作として紫雲英 現在三反部 将来一町歩計画

畑作 大麦目下二反五畝 三反五畝を目的とす

小麦五畝 (前作として大豆)

豌豆 一畝

その他副業 宅地を利用して軟化 (注 軟弱野菜の事。佐藤) 栽培を目的とす

第三項 養畜

(現在) 耕作用 耕作馬 成一 子一 計二頭

鶏 二十羽 採卵兼肉用繁殖用

兔 成二十五羽 子二十餘頭飼育

豚 成二頭 堆肥生産及繁殖用

其他 養蜂, 養魚を自給自足程度の目的とす

第四項 副業

副業は主に農閑利用 宅地利用 其の他利用により行う

一 製炭及木炭製造

二 藁加工品

三 冬季間に於ける育雛事業

其の他 各種 軟化促成, 抑制栽培 食茸栽培 養魚等を主な目的となす

第五項 自給肥料

[表 3-4] 自給肥料計画表

種目	名	頭数	現在	計画	備考
厩肥	馬	二	二千ノ	三千ノ	農牛略 同とす 一頭約二千ノの生産能力あり
鶏糞	鶏	二十	百ノ	二百ノ	鶏類成鶏一羽一ケ年乾燥糞八ノ鶏の見積もり
兎糞	兎	五十	三百ノ	五百ノ	成兎一ケ月八ノを生産 (敷薬一切混ぜず)
豚糞	豚	二	一千五百ノ	二千五百ノ	一頭約一千二百ノ位の見積もり
紫雲英	現三反歩		三百ノ	四百ノ	(反当)
堆肥			八百ノ	千五百ノ	原料 土, 削草, 刈草, 塵芥 落ち葉 その他
人糞尿			七百ノ	七百ノ	一人一ケ年百五十ノ (十荷) を生産するものとする
木炭			五十ノ	百ノ	副業成算
燠炭			五十ノ	二百ノ	同

価格表 現在

厩肥, 堆肥, 兎糞, 豚糞, 紫雲英 (半額) は一人一錢替 全額 四七〇〇ノ四七〇円

紫雲英, 木炭, 燠炭 一ノ 八厘替 八〇〇ノ六四円

人糞尿 一人一錢替 七円

総金額 五五一円也

計画 総金額 九五〇円也

第四章 従業者

[表 3-5] 従業者

従業者	労働能率	労働日数	備考
父	九	三百五十	
己妹弟臨時雇	十八 四 十	三百五十 二百 百 五十	男子一人前の者を十とす

一日の労働時間 十時間とす

第5章 農業用資本の概要

[表3-6] 農業用資本

種目	所有		借入	計		備考
	数量	価格		数量	価格	
土地	2町2反	8,800円	なし	2町2反	8,800円	1人当 400円
田	1町5反	6,000円		1町5反	6,000円	
畑	5反	2,000円		5反	2,000円	
林地	1反2畝	480円		1反2畝	480円	
宅地	8畝	320円		8畝	320円	
建物						
動物						親 450円
馬	2	700円		2	700円	子 250円
兎	50	50円		50	50円	1羽 1円
豚	2	10円		2	10円	生後約1年育成
鶏	20	20円		20	20円	1羽 1円とす
柿	8	8円		8	8円	1本30年前後平均
合計		1,138円				

第六章 生産表

第一項 作物

第一目 水稻

[表3-7] 水稻 (昭和9年度)

種目	数量		生産物	副産物(藁)	生産高(金額計)
水稻	作付	1反	9俵	3.25円(1,620把)	43.75円
	反別	総額 1町5反	135俵	42.15円(2,160把)	649.65円

[表3-8] 原材料

種類	反当	総額
種苗	3.5升(40銭)	52.5升(600銭)
金肥	5円	75円
自給肥料	6円	90円
薬剤他	0.2円	3円
金額計	11.6円	174円

〔備考〕

1. 生産物の俵は、粃1俵(15人) 価格 4円50銭 替
2. 副産物として藁 5把 1銭 替
3. 種苗は、床(苗代)18坪を要す
4. 肥料として、苗代、肥料及本田を兼ねる
5. 薬剤中には、塩(塩水選)、ボルドー液

[表3-9] 労力表 (1人の労力 1日10時間 80銭)

種目	所要労力	畜力	動力	その他(計)
反当	16人(12.8円)	2頭(耕馬) 2円	なし	18.80円
総額	250人(200円)	30頭 30円		230.00円

[表3-10] 収支予算

		価格	備考
収入	生産高	649.65円	粃, 藁も含む
支出	原材料	174.00円	種子, 肥料, 薬剤代
収入	労力高	230.00円	労力一切含む
支出	その他	50.00円	公課, 農具破損料等
雑費			

差引純益 295.65円他

第二目 麦類

[表3-11] 麦類生産表(昭和9年度)

種目		数量		生産物	副産物(藁)	生産高(金額計)
大麦	作付反別	反当	1反	1石5 33.25円	2.5円替	25.75円
		総額	2反5畝	3石75 58.125円	6.25円替	64.375円
小麦	作付反別	反当	1反	1石 16.00円	2円替	18.円
		総額	5畝	0.5石 8.00円	1円替	9.円

*1 小麦については、実際上の数字に変化があったと思われる。

[表3-12] 原材料費

種目		数量		種苗	金肥	自給肥料	藁その他	合計
大麦種苗	作付反別	反当	1反	5升 0.775円	1円	2.6円	0.15円	4.525円
		総額	2反5畝	1斗2升7合 1.91円	2.5円	6.5円	0.375円	10.285円
小麦	作付反別	反当	1反	1石 16.00円	1円 0.5円	2.6円 1.8円	0.15円 0.07円	4.65円
		総額	5畝	0.5石 8.00円				2.325円

〔備考〕

- ・ 販売肥料として硫安, 魚粕 若干施用(使用)(反当)
- ・ 自給肥料として堆肥(厩肥) 150㍗反当 (反当) 1.5円
木炭 10㍗反当 (反当) 0.6円
- ・ 補肥料 人糞尿 50㍗反当 (反当) 0.5円

[表3-13] 労力表 (1人の労力1日10時間80銭 1頭当1円替)

種目	所要労力	畜力	備考	計
反当	8人	3頭(耕馬)	なし	記述なし
総額	24人(19.20円)	3円		23.20円

[表3-14] 収支予算

		価格	備考
収入	生産高	73.379円	主生産物外副生産物を含む
支出	原材料	12.61円	種子, 肥料, 薬剤代, その他
収入	労力高	23.20円	人力, 畜力, 動力を含む
支出	その他	20.00円	公課, 農具破損料等
	雑費		
作引純益		17.565円也	

第三目 豆類, その他

[表3-15] 生産表 (昭和9年度)

種目	数量	生産物	副産物(藁)	生産高(金額収入計)
大豆	総額 3反	1石5斗 15円	穀藁葉 1円	16.00円
小豆	総額 5畝	3斗 3.90円	同 0.3円	4.20円
其他豆類	総額 5畝	3斗 3.90円	同 0.1円	4円
玉葱	総額 3畝	2斗 1.80円	0.5円	2.3円
蔬菜	総額 1反5畝	350円	5円	355円
その他	総額	100円	5円	105円

[表3-16] 原料

種目	数量	種苗	金肥	薬他	自給肥料	計
大豆総額	3反	3升5合 0.35円	0.5円	0.5円	1円	2.35円
小豆総額	5畝	1升8合 0.23円	0.3円	0.2円	0.5円	1.23円
其他豆類	5畝	2升 0.23円	0.3円	0.1円	0.5円	1.13円
玉葱総額	3畝	2升 0.18円	0.3円	—	0.5円	0.88円
蔬菜総額	1反5畝	8円	50円	10円	70円	138円
其他総額		10円	10円	5円	30円	50円

[表3-17] 支出収入表

種 目	支 出		公課・農具其他	収 入
	原 料 高	労 力 高		生 産 高
大 豆	2.35 円	(35 人 1 人 80 銭) 22 円	麦作に含む	16 円
小 豆	1.23 円	(3 人) 2.40 円	麦作に含む	4.20 円
其他豆類	1.13 円	(2 人) 1.60 円	0.2 円	4 円
玉 葱	0.88 円	(2 人) 1.60 円	0.1 円	2.30 円
蔬 菜	138 円	(120 人) 96 円	15 円	355 円
其 他	50 円	(50 人) 40 円	3 円	105 円

収支予算 収 入 470 円 50 銭
 支 出 341 円 09 銭
 差引純益 129 円 41 銭他

第二項 養畜

[表3-18] 養畜(昭和9年度)[これ以外に養魚, 養魚計画中]

種 目	馬		豚		鶏		兎	
	数 量	価 格	数 量	価 格	数 量	価 格	数 量	価 格
子・畜	1	80 円/毎年					2.3	6.90 円
卵					2,600 個	108 円		
毛							20 枚	10 円
肥 育								
育 成								
使 役	自 用	50 日 50 円						
	使 用	15 日 15 円						
副産物	堆肥	(2,000 斤)	1,500	15 円	100 斤	1.5 円	300 斤	3 円
価 格	2,000	20 円	1 斤					
合 計		165 円		15 円		109.5 円		19.9 円

[表3-19] 原 料 価 格 円

種 目	馬		豚		鶏		兎	
	数 量	価 格	数 量	価 格	数 量	価 格	数 量	価 格
飼料価(円)	2	36.5	2	10.05	20	36.5	50	1
幼畜購入価								
其 の 他		2						30
金 額 合 計		38.5		10.05		36.5		31
差 引(円)		126.5		4.95		73		18

・豚の飼料としては自家生産飼料及残飯鶏は放し飼いとす
 純益合計 243 円 05 銭也

第三項 収支予算

[表 3-20] 収支予算① 収入 (本文中数字は昭和8年度生産額による)

	価 格	備 考
重要農産及園藝農産	342 円 62 銭 5 厘	米, 麦, 菜, 豆類, 蔬類, 其の他
果 樹	20 円	柿, 葡萄, 栗, 苺
自 給 肥 料	551 円	堆肥, 緑肥, 厩肥, 人糞尿, 燐炭, 家畜糞, 他
林 野 副 業	2 円 50 銭	竹, その他
養 畜	243 円 05 銭	養鶏, 養豚, その他
農 産 加 工	50 円	藁加工 (冬期間作業)
兼 業 所 得	30 円	兼業勤労所得

[表 3-21] 収支予算② 支出 (本文中の数字は昭和8年度の支出)

		備 考
金 肥	85 円	大豆, 魚粕, 硫酸, カリンサン石灰, 石灰, 窒素, 酸加里
金肥節約	25 円	配合の研究, 成分の熟知, 自給肥料, 堆肥舎設置, 結の肥料増産
生活費節約 生活改善		器具費 18 円, 種苗肥 5.05 円, 家畜飼料 28 円, 農業薬剤 3.5 円, 原料材料費 25 円, 租税年公課並小作料 98 円, 虚礼排除, 質素節約, 無駄排除, 娯楽場統制, 被服費 38 円, 食費 375.5 円, 養育費 25 円, 衛生費 3 円, 交際費 35 円, 娯楽費 5 円, 器具維持費 10 円, 臨時費 20 円, 光熱費 8 円
其 の 他		農産加工料 1 円, 家族労力 406.8 円

第七章 収支決算

収 入 1239 円 17 銭 5 厘
 支 出 1231 円 30 銭
 差引純益 8 円 12 銭 5 厘也

以上のように、詳細を極めた調査内容となっている。こうした報告書記述は、講師陣や「家」の助けを借りて綿密に行われたが、今のところこうした報告に関する分析は日本農士学校側資料に見当たらない。

「我が農場」からは、農地や労働力、扱うすべての農畜産物の特性と販売額及びそれに要する肥料や農薬などの経費も明らかにされている。加藤家の場合、農地や家族労働力、畜力等を巧みに組み合わせ、多品種生産と農産加工にも取り組み、極力むだのない合理的経営につとめていることが分かる。そして、日常にかかる生活面の経費にも目配りし、すべてのキャッシュフローを把握することで生活改善を図ろうとしていることが見て取れる。そして注目されることには、この報告書が作成された昭和七、八、九年が未曾有の冷害で東北農民が最も厳しい窮乏化に瀕していた時、僅かとは言え剰余を計上していることである。まさに村の模範的農家を典型的に示す経営実態が明らかにされている。

次いで、家族労働に対する労働力評価をしている点である。どちらかといえば労働における無償性の原理が働く農家において、次代を担う青年が此の点に着目し統計的処理をしているこ

とは、日本農士学校の指導が経済合理的、社会科学的視点をも持って学生の指導に当たっていたことを示すものと考えていいだろう。

5節 結びにかえて

「農村視察報告書」の作成と「我が農場」という二つの実習には、生徒が家計や農場の経営内容を整理分類することで実情を把握し、そこから課題を見いだして生活や経営の合理化を図ること。その上で各自の村に最も適切と思われる動物や作物などを選び取り、それらの飼育（栽培）方法やその応用に関する知識、技術を習得することによって農村経済に資することを目指していたことが明らかになった。そして、これらの報告書を元に学生は指導を受け、帰郷してからの農業経営の方策を立てた。しかし、それだけでは不十分なので、帰郷してからも篤農協会や金鶏学院が主催する農道講習会などに参加することで常に学習を怠らなかつた。そのことが、家族や村民の信頼と尊敬を高め、やがて村の指導者として多くの学生が成長していく契機となった。当時の支配層にとって農村指導者を育成する眼目の一つは、窮乏化が激しく進行する農村にあって¹⁰⁾、経営感覚を近代的に磨くことであった¹¹⁾。家計も経営も未分離状態にある農村だからこそ、そうした学習の場が特に要求されていた。農業補習学校の拡充や農学校の新設などのような中等教育（またはそれに準ずる）機関の拡充、農業経営や農村生活全般にかかわる社会教育の講習会が内務省や文部省などによって積極的に展開されたのもこれらが背景となっているが、日本農士学校は、こうした課題にこたえ得るまさに模範的農民（村）指導者養成機関であった。

そして安岡、菅原は、極めて観念的な農本（主義）思想の持ち主ではあったが、やみくもに土に生きろと強調したり農村に青臭いロマンを求めたりするような浅薄な農本（主義）者ではなかつた。強烈なエリート意識とそれにふさわしい実績に裏打ちされて、農村社会の中心人物たるべき人材にはより深い教養と精神的鍛練を、中堅人物として部落の農業経営をリードする者にはそうした知識と技術の習得を求め、それぞれがしかるべき役割を「分に応じて」果たせるよう、指導内容、方法を吟味していたのである。

そのことを、学生達が十二分に受け止め、郷里に帰ってからも実践し、迷いを生じたときや、もっと学習・修養を深めたいときは、篤農協会で行われる地方農道講習会や、金鶏学院、日本農士学校で開催される講習会に参加したり、機関紙を繰り返し読むなどして自分の意欲（理想）を維持し続けたのである。

ここにこそ日本農士学校の指導の特徴が明瞭にあらわれている。すなわち、参学（入学）生が生涯にわたり指導（生涯学習）を受けられる体制が組まれていたことである。日本農士学校の最も大きな功績は、そのような意識を持った人材を育成し、彼らが農村社会において生涯活躍するイデーを養成した点にあると言えよう。

結論的に言うならば、「利用科目」の学習は「正徳科目」とともに各人の中で調和的に統合され、農村に深く根を下ろした武士道の実践をすることが目標だったのである。そもそも、実践によって村民を感化し導き、いかなる困難にも屈する事なく日本古来の農村文化と秩序を守り、西洋の資本主義的文明の悪しき部分を排除し、「世界に冠たる」皇国日本の優秀性を伸長させることこそが日本農士学校の歴史的使命であると認識されていた。個々人の真摯な実践の継続は単なる疲弊した農村文化や経済の復興にとどまらず、東洋文明の精華を支える基盤の絶え

ることのない再生を意味していた。だからこそ、「農士道」の提唱者菅原兵治が主張したのは、稲作においても畑作においても基本は土作りだったのである¹²⁾。それは、土作りという土台ができて初めて健全な作物が育つことであり、その過程は人間形成の基本と同じであるからという理由による。ここには、冷害に苦しむ東北農民の生活をも踏まえた発想が見て取れるが、菅原にとって、農に関するあらゆる営みは即人間育成であった。したがって、農に生きることは一生をかけた人間としての修養なのであり、そのためのあらゆる手立てを構想していた。その一環に「利用科目」「我が農場」「視察報告」「卒業論文」作成があり、それらは基本形成の意味を持ち、その基本に立って「農士道」を一生涯学習し実践し続けられる体制の整備を図ったのである。これが日本農士学校における教育体制の優れたところであった。

謝 辞

本論文の作成に当たっては、財団法人日本郷学研修所、財団法人安岡正篤記念館、財団法人東北振興研修所に大変お世話になった。関係者の方々の懸命な努力によって収集された貴重な資料の数々を快くお見せいただいたこと、さらに筆者の素朴な質問にもひとつひとつお答えいただき、関連する事柄などの解説を含め、丁寧なご指導をいただいた。深く感謝申し上げる。

(本稿は上廣倫理財団平成10年度研究助成による成果の一部である。)

注

- 1) 安岡正篤のいわゆる「純正日本主義」。堀幸雄『右翼辞典』、三嶺書房、1991、p.579。山本彦助検事の『国家主義団体の理論と政策』抄(p.11-13)によれば「純正日本(皇道)主義」。『現代史資料(23)国家主義運動(三)』、みすず書房、1974、所収。尚、安岡、菅原は「主義」という言葉に対して極めて慎重な姿勢であったので、彼らについての思想を示す時、農本(主義)とかっこづきにしてある。
- 2) 拙稿「昭和期における農村指導者の育成に関する資料の基礎的研究—安岡正篤と菅原兵治をめぐって—」『研究助成報告論文集』上廣倫理財団、2002、p.45-57。「『日本農士学校』のカリキュラムと指導について」、『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 第1号』、2002、p.1-17。
- 3) インターナショナルな運動としての労働者や農民の国際的連帯と平和運動。日本においては吉野作造や石橋湛山の帝國的侵略への批判や宮城県石巻市出身の弁護士布施辰治の朝鮮民族支援運動など。
- 4) この意味で「ブロック経済化とそれともなう国際的対立の激化は、世界経済のなかで相対的に弱い地位しかもちえなかったドイツ、イタリア、日本といったような後進帝国主義国にはファシズムの擡頭をうながす契機のひとつになった」と指摘されるように、厳しい労働者や農村の状況を背景とした社会不安の増大に対して、労働運動、農民運動への弾圧(後には自由主義者にも及ぶ)やテロリズムの横行などのような支配層の政治的混乱状況が「昭和維新」を強調する右翼や一部軍部の直接的行動を招き、次第にファシズム的状况を招来する要素がほぼ出揃うことになる。揖西光速・加藤俊彦・大島清・大内力『日本資本主義の没落Ⅲ 双書日本における資本主義の発達8』、東京大学出版会、1973、p.614。
- 5) 特に、大正天皇の病状の進展と政治的求心力の低下を原因として、皇太子裕仁の婚約問題に

からむ、いわゆる「宮中某重大事件」によって1921年に年政治の表舞台に登場した大久保利通の次男、牧野伸顕がその中心である。この牧野の登場については、Herbert P. Bix “HIROHITO AND THE MAKING OF MODERN JAPAN” 吉田裕監修、岡部牧夫、川島高峰訳『昭和天皇(上)』、講談社、2002、p. 87-93。

- 6) 菅野正『近代日本における農民支配の史的構造』、御茶の水書房、1978、p. 643-657。長原豊『天皇制国家と農民—合意形成の組織論—』、日本経済評論社、1989、p. 331-415。
- 7) 前掲「『日本農士学校』のカリキュラムと指導について」。
- 8) 金子泰作、関根茂章氏ら日本農士学校関係者による述懐。
- 9) 日本農士学校生は全寮制であり、生徒は各「家」(班)単位に所属し、疑似的家族(下線佐藤)として共同生活を営んだ。
- 10) いわゆる農業恐慌についての分析は、大内力『日本現代史体系 農業史』、東洋経済新報社、1960(昭和35)年。
- 11) 岩手県立六原青年道場、宮城県農学寮などのいわゆる修練農場においてもこの点は重視されていた。どちらかと言えば苛酷な労働と精神主義の面が強調されがちだが、本質的には帝国主義段階における自立的農民として農業全般を経営して行く知識と技術の習得が目指されていた。
- 12) 菅原兵治『我づくり入門』、財団法人東北振興研修所、昭和53(1978)年。